

中央大学杉並高校国語科 一般入試の出題方針

～受験生の皆さんへ 国語科からのメッセージ～

本校の国語入試は、小学校や中学校で学習してきた「日本語の運用能力」がどのくらい定着しているか、またその力をどのくらい生かすことができているかを様々な角度からはかることを目的としています。

日本語の運用能力」とは、日常生活の中で「言葉」と意識的に向き合うことで磨かれ、高められてゆくものだと思われがちです。先生・家族・友達等の話やニュースの言葉に関心を持って考察したり、読書を積極的に行ったり、文章中の情報を順序立てて整理したり、自分の考えを文章でわかりやすく的確にまとめたりする、そのような学習に積極的に取り組む「日本語の運用能力」を日々高められる人に、活躍してほしいと願っています。

さて、二〇二〇年度の入試問題の構成は、以下のようになっています。

○漢字の読み書き：新聞等でよく目にする時事用語や、中学生の間に読んでおいてほしい書物などから出題します。

『ニュースに関心を持っていますか？』読書はしていますか？』というメッセージを込めています。

○古文読解：古文または漢文の内容読解について出題します。古典文法の知識のみを問うことはしません。大まかな内容把握ができる力を問います。

○長文読解：現代文(説明的文章もしくは文学的文章)の内容読解について出題します。情報を適切に取捨選択する力、論理展開を正確に把握する力、総合的に解釈する力を問います。

○要約：八〇〇字程度の文章を一〇〇字程度に要約する問題を出題します。ここでは文章中から必要な情報を正確に抜き出し、筋が通るようにまとめる力を問います。本校では高校三年次に、全員が卒業論文を執筆します。論文作成には膨大な数の文献から必要な資料を探し、的確なことを選び筋道を立てて文章を作る力が必要です。入試でもそれらの力に関連する要約の問題を出します。

また二〇一九年度入試まで出題していた**語彙・表現の問題**を、**短文を読んで情報を整理する問題へと変更**します。これは理科や社会も含め、中学校の教科書をきちんと読めていますか、ということを確認するものです。日々の学習の中で、教科書をしっかりと読んでおいてください。

【要約文作成のポイント】

文章を正確に読み、的確に記述する力は、私たちが生きていくために必須の力です。要約問題では、その力をはかるために百字以内で「文章の論旨」をまとめてもらいます。

過去の問題で、要約の手順を説明してみましたので、ぜひ取り組んでみてください。

問 次の文章を八十字以上百字以内に要約しなさい。

- ① 三文で要約すること
- ② 第二文の書き出しを「しかし」、第三文の書き出しを「つまり」で始めること
- ③ 解答欄の一マス目から書き始め、句読点も一字に数えること

「今さら引き返すのは、プライドが許さない」「プライドが邪魔をして、頭を下げられなかった」。このような発言を耳にしたことはないだろうか。

一段落

ここでいう「プライド」は、こころ一番での決断力を鈍らせ、その人が次のステップに一步踏み出すことを妨げる、いわば足かせのような存在となってしまう。このような存在になってしまうのは、私達がプライドの正体を履き違えているためなのである。

二段落

私達はとかく、プライドとは、何か他人にできないような偉業を達成できたときに初めて生まれるものだと思います。プライドを持つには、他者と比べて秀でた能力や素質が自分がないと駄目だ。そんなふうを考えるから、自分にしかない優れた特性を、日々必死になって探してしまう。そんなもの、滅多に存在しないのに。私達は、他人にはない特性があること(Ⅱ)プライドを持つ資格があること(Ⅰ)、ひいては(自分の存在価値があること)、という考えに捕らわれてしまっているのだ。だから、引き返したり頭を下げたりするのは、自分に優れた特性がないこと、さらには自分の存在価値がないことを認めるようで、実行するに耐えない行為なのだ。

三段落

だが実は、自分だけの優れた特性なんて躍起になって探す必要なんてない。プライドとは、今現在いる自分がこのままで他人に大事にされている、受け容れられていると感じる、本来そのような経験をしたときに生じるものなのだ。この、他者から大事にされているという思いは、何か大仰なものをしてもらわないと感じられないものではなくて、だれもが日常ささいなときに何度も味わっているはずのものだ。たとえば学校を休んだ翌日、登校した際に、だれかが「どうしていたの？」と尋ねてくれたとき、じんわり嬉しくなるだろう。その嬉しさが、自分が存在することへの自信に変わっていく。この

自信こそがプライドの正体なのだ。

四段落

他者との関わり合いによって、私達は自分が何か意味のある存在であることを身に沁みて知る。このような経験を積み重ねることで、人はおのれの存在に誇りを持つようになっていく。自身の存在を承認される経験、自分が周囲から価値ある存在と認められる経験を重ねて、人は安心感や自信が生まれ、自分自身を尊重する気持ちが生まれる。プライドとは、こうして存在を肯定される環境の中で揺るぎのないものとして育っていく誇りなのである。このように育ったプライドは、成長の足かせなどではなく、自身の生きる土台となるのだ。

五段落

(本文を作成するにあたり驚田清一『大事なもの見えにくい』を参考にした)

論理的な文章で大切なことは、一般論とは異なる筆者の「主張」を読み取ることですが、その「主張」を支えているのは「根拠」です。両者の間に密接な関係があることを意識しながら、「主張」は何か、それを支える「根拠」は何か、ということを中心に要約文を組み立てます。

まず、条件②に注目してください。「しかし」「つまり」を使用することが決められています。「しかし」は逆接、「つまり」は結論を導く際に使用される接続詞ですね。ということは、「主張」は「つまり」の文に、「根拠」は「しかし」の文に入ると都合が良いようです。では、実際に要約文を作ってみましょう。段落ごとにどのようなことが書いてあるでしょうか。

一段落……プライドに関する発言

二段落……「プライド」は、こころ一番での決断力を鈍らせ、その人が次のステップに一步踏み出すことを妨げる、いわば足かせのような存在

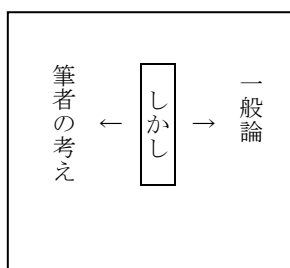
三段落……私達とはかく、プライドとは、何か他人にできないような偉業を達成できたときに初めて生まれるものだと思ってしまうがち

四段落……プライドとは、今現在いる自分がこのままで他人に大事にされている、受け容れられていると感じる、本来そのような経験をしたときに生じるもの

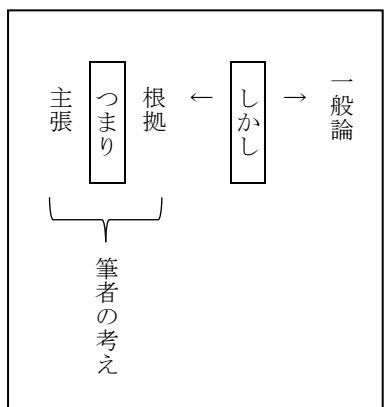
五段落……プライドとは、こうして存在を肯定される環境の中で揺るぎのないものとして育っていく誇り／プライドは、成長の足かせなどではなく、自身の生きる土台

このように抜き出してみると、【一・二・三段落】と【四・五段落】とでは、プライドについて異なることを言っていることが分かります。

【一・二・三段落】では、「思ってしまうがち」という言葉からも分かるように、プライドに ついての一般論が述べられています。論理的文章は多くの場合、一般論に対して、それとは異なる筆者の考えが提示される形式がとられます。



一般論とは異なる筆者の考えを述べるわけですから、当然「根拠」が必要となってきます。



つまり、一般論としてのプライドを【一・二・三段落】から一文でまとめ、根拠・主張を【四・五段落】からまとめます。

【正答例】

プライドは、人より優れた特性によって生まれると思いがちだ。しかし実際は、自分が他人に大事にされたという経験によって生じるものである。つまり、プライドは、存在を他者から肯定されることで育つのだ。(九十六字)

参考までに、誤答例も挙げます。

【誤答例】

例1 私たちは(1)プライドの正体を履き違えている。しかし、(2)自信こそがプライドの正体なのだ。

…(1)「プライドの正体」では、プライドの内容がわかりません。(2)「しかし」を挟んでいます。…(1)と(2)とは逆接の関係になりません。

例2 私たちは自分にしかない優れた特性を必死になって探してしまう。しかしその必要はない。(1)つまりプライドとは、自分が他人に大事にされている、と感じるときに生じるものであって、他者と自分を比べる必要はない。

…(1)「つまり」と書いてありますが、内容から考えると「なぜなら」と書くべきでしょう。

例3 (1)自分が他人に大事にされなくてはプライドは持てないものだ。つまり、(2)自己を他人に承認してもらうことによって安心感や自信が持てるのだ。

…(1)「～されなくては～持てない」と打消しの形で書かれています。打消しの形は意味をあいまいにします。「～されるとき持つ」と肯定の形で書きましょう。(2)「安心感や自信」の話で終わってしまい、「プライド」の話にまでいたっていません。

以上のことを参考にして、一般論と筆者の考えの相違、筆者の考えを述べるための「根拠」と主張の関係、などに注意しながら、要約文の練習をしてみてください。文章を正確に読み、その内容を的確にまとめる力を身につけましょう。